

平成30年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践レポート】

- 1 報告地区：後志地区
- 2 事例報告学校名：喜茂別町立喜茂別小学校
- 3 報告者：校長 三浦 卓也
- 4 キーワード：学力向上（小中連携，ICTの活用）

1 はじめに

喜茂別町は、札幌市と隣接し、北海道を代表する羊蹄山の麓にあり、森林が77%を占める豊かな緑に囲まれた「農業の町」である。本校は、町の中心に位置し、児童数77名、今年で開校119年を迎える小規模校である。平成26年度より「学校力向上に関する総合実践事業」の特別連携校として指定を受け、研究主体校の実践に学びながら包括的な学校改善に組んできている。特に、学力の向上に向けては、学習規律や教室環境に統一性をもたせたり、課題とまとめを明示する学習過程の徹底を図ったりしながら、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を学校全体で推進している。

ここでは、こうした取組と連動させ、重点的に進めてきた「小中連携」と「ICTの活用」について紹介する。

2 具体的な取組

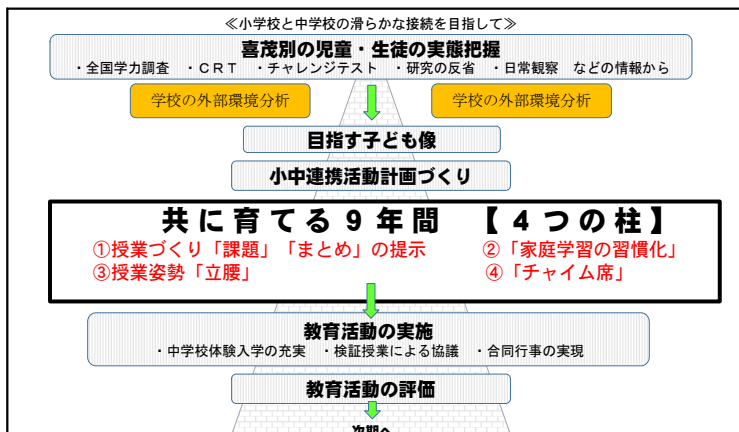
(1) 小中連携

本校に着任した時、児童が中学進学後に不登校となるケースが続いている実態があり、いわゆる「中1ギャップ」解消への対応が求められていた。併せて、本町で育つ子どもを中核に据え、小中が連携して教育を推進しようとする教職員の意識も十分とは言えず、義務教育9年間を通し、子どもが安心して育つ環境と豊かに学ぶための授業を改善していく必要があった。そこで、町内全3校（小2校，中1校）の校長間で課題解決に向けての方策を熟議し、「各校の経営の重点に小中連携を位置付け教職員の意識の共有を図ること」「小中9年間を見据えた授業改善を図ること」を共通課題とし、3校で連携して改善に取り組んだ。

①連携に向けたベクトルの共有・意識化

重点に位置付けた「小中連携」の具体的な取組については、学校職員人事評価制度の業績評価に係る自己目標シート（学校設定項目欄）に、「具体的な目標」（※3校共通）と「目標達成のための取組方法等」を明記させた。面談等を通して、ねらいや取組へのベクトルを共有し意識化を図った（※右図）。

②喜茂別町教育研究会と連動させた小中連携の推進



自己目標シート（学校設定項目）に小中連携を位置付け意識化を図る	
今期の具体的な目標	目標達成のための取組方法等
校長 学校設定項目 義務教育9年間を通し、児童の学力向上を図る。	喜茂別町小中連携協議会の協議を推進し、町内3校との連携を図る。P D C Aサイクルを活用し、喜茂別中学校、喜茂別小学校、喜茂別中学校の教員と連携し、小中連携の意識の高揚を図る。
教頭 学校設定項目 義務教育9年間を通し、児童の学力向上を図る。	町教頭と連携し、取組や相互の連携交流を一層深める。
教諭 学校設定項目 小・中学校が連携して教育活動の実施を図る。	・中学校の授業を参観するなど、中学校との交流に努めていく。 ・中学校との接続を意識した授業づくりに努めていく。

小中連携を強める方策を3校全体で協議する場としては、既存の喜茂別町教育研究会（※以下町教研）の研究内容に「小中連携の充実」を加えて専門部会を改編し「小中連携学習部会」を新設した。そこからは、「できるところからやってみよう」という視点で『共に育てる9年間【4つの柱】』が設定され（※左図）、各校でこれらを校内研修の研究内容に組み込み、共通実践を行うこととした。

③「喜茂別町小中連携授業研」を通じた実践検証

本校では、全学年共通の「喜茂別小学習スタイル」(※右図)に前述の【4つの柱】を組み入れ、全教師が共通の視点で授業づくり・実践を行っている。検証の場としては、校内研のほかに町教研を基盤とした「小中連携授業研」がある。公開授業をもとに、小中の全教員が混ざってグループを作り、ワークショップ型の研究協議を行う。協議にて出された成果や課題は、町教研小中連携学習部会の中で整理されたのち、次年度の研究の視点に組み込まれ、各校へダウンロードされてくる仕組みとなっている。



小中連携授業研の様子

ワークショップ型の研究協議の様子



ワークショップ型研究協議の様子

小中連携【4つの柱】の視点を組み入れた「喜茂別小学習スタイル」(※一部抜粋)

(○児童に係ること ☆教師に係ること)

段階	主な学習活動	特に国語科に関すること
授 業 準 備	<ul style="list-style-type: none"> ☆教室掲示 ☆単元の学習計画 ☆時間配分の設定 ○学習規律、机上整理 	<ul style="list-style-type: none"> ☆単元指導計画の提示 ☆授業の柱の確認 ☆ワークシートの準備 ○家庭学習、朝自習等の言談
つ か む	<ul style="list-style-type: none"> ①前時の振り返り ○前時のノート、ワークシートの活用 ②課題の設定 ○児童の言葉をつなぎながら課題を設定する 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を貫く課題 ○個人課題の設定 ☆「課題」と板書 ○単元指導計画の活用
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ③本時のまとめ ○児童のこぼれをつなぎながらまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ☆「まとめ」と板書

(2) ICTを活用した授業改善

本校では、グローバル化や情報化等の変化が急速に進展する社会の中で、子どもたちに体系的に情報活用能力を育成することや「主体的・対話的で深い学び」におけるICTの効果的な活用を実現するため、ICT環境を整備し、教員の資質・能力の向上を目指した先進地への視察研修等を行いながら授業改善に取り組んでいる。

① ICT環境の整備

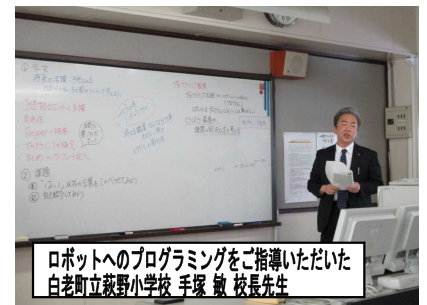
本校の整備状況は、平成25年度に実物投影機(全学年教室)、平成26年度には校内無線LAN環境の整備、平成28年度には一学年で児童一人につき1台のタブレット(全28台)が導入され、ICTを活用しての授業環境には恵まれている。次年度は、授業への効果的な活用をコーディネートするICT支援員の配置やロボットを活用したプログラミング教育の導入も視野に入れ、学ぶ環境の整備・充実を目指している。



6年国語科「鳥獣戯画を読む」・・・タブレットと活用した授業風景

② 先進地への視察

平成28年度より町費負担によりICTを活用した教育に係る先進地への視察研修を実施し、教職員の資質、能力の向上を図っている。平成28年度は遠別町(遠別小学校、遠別中学校)にて「ICT環境の整備とタブレットの効果的な活用」、平成29年度は豊頃町(豊頃小学校、大津小学校)にて「ICT機器を活用した遠隔授業」について学ばせていただいた。さらに、本年度は白老町(萩野小学校、竹浦小学校)にて「感情エンジン」と「クラウドAI」を搭載した感情認識パーソナルロボットを実際に動かす演習やロボットを活用した授業参観等を通し、「プログラミング教育」について学ばせていただいた。



ロボットへのプログラミングをご指導いただいた白老町立萩野小学校 手塚敏校長先生

3 おわりに

小中の教職員が、学習規律や授業スタイル等を共有し検証授業を通じて協議する場が設けられたことにより、義務教育9年間を連携し教育を進めようとする意識が向上した。また、ICTに係る環境整備や先進地への研修促進により、タブレット等の機器を授業で効果的に活用する教職員の資質・能力も高まっており、一層の学力向上を図る授業改善につながっていると考える。